
恋

守利上 響

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋

【Nコード】

N1021A

【作者名】

守利上 響

【あらすじ】

高校三年、受験も終わり暇な毎日。そんな時、ルルというメル友ができる。そのメル友が・・・

ルル

貴方と過ごした三ヶ月はとても幸せでした。貴方はとても優しく、愛しくて・・・

貴方しかいない、そう思っていました。確かにあたしと貴方は歳が十五も離れていて、貴方に取ったらあたしなんて娘みたいな存在だったかもしれません。それでも、あたしは貴方に抱かれている間は一人の女でした。

急に目の前からあなたがなくなつて、あたしは苦しくて苦しくてどうしたらいいのか解らない。涙も止まらない。何故あなたがいなくなつたのかは解っているの・・・恋人としてでなくてもいい。もう二度とあたしを抱いてくれなくてもいい。だから、だから戻つて来て・・・

高校三年。推薦で大学受験をしたため暇な毎日。部活もやってない。脳みそをあまり活動させていないあたしのまわりは何故か頭のいい努力家な友達。彼氏もいるけどみんな一般受験。遊んでくれない・・・ひまだなゝってなんとなく携帯をいじってたらしいのまにかメル友ができてた。二人。あたしは杏ちゃんと名のつてメールをしていた。ルルというタメの女の子と拓という二十七の会社員の男。ルルはなかなかいい奴であたしと合うって言つか、お互いにメールしたいときにメールし合えた。さばさばしてて男らしいんだけど、あたしが悩んだり、落ち込むような事があつたりすると、メールでのやりとりなのに気づいてくれて、話をきいてくれたりと優しい子だった。その転、拓は、何回かメールしていくうちにエッチなメールしか送ってこなくなつたから最後の方は無視を決め込んだ。なかなかしつこい奴だった。

今もルルとメール中。実は今度会おうって事になってそのことでメールしてるのだ。

「愛！」

呼ばれてメールを打つのを中断して声のした方に振り返った。

洋平だった。

愛の彼氏で高三の初めのころからつきあい始めた。

受験勉強が忙しく、最近はあまり遊んでない。

しかも会っていても愛がメールばかりしているせいで小喧嘩が絶えない。

今もそのせいで少しいらついた声がしたのだ。

「お前俺と一緒にいるときくらいメールやめろよ」

いらついてはいるものなるべくそれを押さえようとして愛の手を握りながら言った。

最近学校が終わると洋平の予備校まで一緒に行っていた。今もその途中である。

「だって今ルルといつか会うか決めてんだもん」。

またメールを打ち始める。

洋平は呆れたようなため息をついて握った手をほどいてさっさと先に行ってしまった。

愛は少し驚いたが、またか、とそのままメールを打ち続けた。最近毎回これの繰り返しである。悪いとは思ってはいるのだがルルとのメールが止められないのだ。こんなに人に興味を持ったのは初めてだし、何より、ルルとの会話が楽しくてしょうがないのだ。メールが来た。

『来週の土曜はだめ???』

『いいよー 何時にどこにしようかあ???』

『あたしが杏ちゃん家の方行くよ(o^ε^o) 家は田舎で何もないし(<o>.:』

『じゃあ、横浜駅で待ち合わせでいい???』

『うん よいよ』

何時にしよつかあ? 杏ちゃんって夜も遊べる人?』

・・・と、メールが続く。

夜・・・って何時くらい的事を夜と言っているのだろう。愛の家は夜遊び禁止で門限は九時。いまどきの高校生にしたら考えられない時間だ。しかし箱入り娘の愛は親の意向にしたがって、きちんと夜九時には余裕に家にいるようにしている。しかもバイトもしていない。彼氏がいることさえ内緒にしている。そんな愛が携帯のサイトで出会ったメル友と会うなんて事を両親に知られたら大変な事になるだろう。携帯を取り上げられるだけでは済まないだろう。だから親にはばれない様にルルと会いたい。そう思って、いまどき門限九時なんて恥ずかしくて言いたくなかったけど、正直にメールを送った。

その後、メールはなかなか帰ってこなかった。バイトでもしてるのかなと特に気にせず家に帰った。いつもと変わらず何もする事が無い。愛は制服のままベッドに横になった。なんとなく枕元においてあった読みかけの漫画を読みはじめたところで携帯がなった。ルルかと思いきやよく起きて鞆から携帯を取り出した。ルルではなかった。洋平だった。今日怒って先に行ってしまったことを詫言るメールだった。そんな事どうでもよかった。とりあえずルルからの返事が欲しかったのだ。

愛は溜息をついた。そんな時、下から「ごはんよ」と言う母親の声が聞こえ、携帯を机の上の充電機にさして下へ降りていった。洋平のメールには返事を返さなかった。

最初は誰も遊んでくれないと言う理由からはじめたメル友の関係。だけどメールをしていくうちに暇つぶしの相手に魅力を感じて惹かれていく自分がある。ここまで一緒にいて（正しくはメールをしていて）楽しさを感じた事は無い。出会ってまだ一ヶ月弱、彼氏よりも重要な人物になってきている。メールの内容や言葉遣いからしてどこにでもいるような女の子ののだが、なぜか気になる。そんな自分が不思議で仕方が無い。少し怖い気もする・・・

玲子

「子供ができたの」

そういわれて少年はくわえていた煙草を落としそうになった。

「はあ？」

あまりのとつぜんの言葉に声がうらがえってしまった。

今年の夏に15になったばかりの中学生が言い渡される言葉ではない。

しかし、目の前に正座して座っている女の目は真剣だ。

「病院に行ってきたの。三ヶ月らしいわ。あなたの子よ、どうする？」

目の前の女は落ち着いた様子で聞いた。どうするもなにも、まだ中学も出ていない少年に何ができるわけでもない。少年は煙草を灰皿に押しつけた。

着信音がなった。今度こそルルからだった。

『返事遅れてゴメン』

（<0>：バイトだったんだ〜！

てかそつかあ、箱入り娘なんだねえ　べつにただ単に聞いたただけだから気にしないで　じゃ待ち合わせは十二時くらいでいいかなあ？
？？』

返事が返ってきて安心した様子の愛は即座に返信メールを打ち始めた。

最終的にお互いの携帯番号を交換し、待ち合わせの改札のどこにいるのか分からない時電話することに決まった。

愛は来週の土曜日が楽しみで仕方がなかった。ルルはどんな子だろうか。実際に会ってもメールの時と同じように楽しくできるだろう

か。そんなことを考えながらその日は眠りについた。

「どうしたんだ？急に呼び出したりして。」

政夫は待ち合わせの喫茶店に入り、呼び出された相手の顔を見つけるなり言った。

「急にごめんなさい。どうしても早くあなたに言いたいことがあった、」

「いや、休憩中だから大丈夫だけど、」

玲子から呼び出すなんてめずらしいな」

政夫はいぶかしげな顔をして見せた。ウェイトレスが後から来た政夫に気づき、お冷を持ってきた。

玲子はコーヒーを一口飲み、少しためらった様子で政夫を見た。

「どうした？」

なかなか話を切り出せないでいる玲子を不思議そうに見つめる。

玲子の口が開く。

「妊娠したの、、、」

「えっ、、、？」

あまりの急な言葉に声がでなかった。落ち着こうと水を一口飲んだ。本当に？という視線を玲子に送る。玲子は軽くうなづいた。

「そうか、、、わかった。玲子、結婚しよう。」

「政夫、、、」

「もう付き合い始めて五年になる。そろそろ結婚してもいいと思ってた。子供もできた事だし、ここらへんで一回落ち着こう。」

「うん、、、」

「でも、避妊は一応してたのにできるときはできちゃうんだな。」

そう、避妊は毎回ちゃんとしていた。確かに毎回コンドームをしていたからと言って必ずしも避妊できているわけではない。しかし、あの子とは違った。毎回会ったび二人とも普段の自分を忘れて抱き合っていた。避妊なんか特に考えてもいなかった。直接中に出す事

は無かったが、コンドームなんか平気で使っていなかった。別に愛していたわけじゃない。なんとなく同じような生活に飽きて、いつもの自分ではないような自分を誰かに知って欲しかった。それが、政夫の仕事が忙しく、寂しかったのかもしれない。

罪悪感を感じた。このお腹の子は政夫の子じゃない。でもまだ子供なあの子ではなく、政夫の子としてこのお腹の子を育てる事を決意したのだ。

五年間も続いていて、その間の少しの過ちでできてしまった不幸な子。私が絶対どんな手を使ってでも守ってあげる。どんなひどい女になっても。玲子はそう誓ったのだ。

玲子（後書き）

いきなりなんの話??? と思ったかもしれませんが次でわかるかも。いや、その次かも、、、

洋平

なかなか返事を返さない愛に痺れを切らしていた。メールを送ったのは一昨日。金曜日の夕方だ。喧嘩の後でもあるし、もう一回こちらからメールをするのも癪だ。そのため、洋平はこの週末を終始いらいらして過ごす事になった。もちろんこの休み中も予備校に通っていたが、あまり勉強に身が入らなかった。最近の愛はどこかおかしい。ルルとかいうメル友ができてからと言うもの、メールに夢中で彼氏である洋平との時間より優先順位が高い。ルルとか言う名前だが実は男で、自分よりそちに心が動いているのでは、と思うときさえある。

考えれば考えるほど胸が痛くなる。本気で愛の事が好きだし、高校卒業してもずっと一緒にいたいと思っている。だから愛がメル友に夢中なのはいい気がしないし、ましてその相手が男で自分よりもそちに気持ち揺れていたなら自分はどんな行動に出るか解らない。それくらい愛を想ってる。確かに今は自分が勉強勉強で愛には寂しい思いをさせているかもしれないが、受験が終わればそれも無くなる。それまでは耐えていて欲しい。

結局、自分もわがままなのかもしれない、、

愛は鏡にうつった等身大の自分を真剣にみつめていた。髪型ok、服ok、メイクok、バッグok。と、チェックをしていく。今日は初めてルルと会う待ちに待った大切な日だ。

変な格好をしていくわけにはいかない。最後に全体のバランスをチェックする。

約束の十二時の十五分前。愛の家から駅まで歩いて十分。今から出れば五分前に待ち合わせの改札に着く。愛は自分の部屋を出ると急ぎ足で階段を降り、リビングでテレビを見ながら笑い転げていた母

親と弟に、出かけてくる、とだけ言つて家を出た。

そのまま急ぎ足で駅へと向かう。今日はいいい天気だ。太陽の光を浴びながら愛はこれから初めて会うルルの事を考える。こんな何が起こるかわからないドキドキ感はどうくらいぶりであろうか。愛にとつて洋平がはじめての彼氏なのだが、その洋平と付き合い初めの頃だろう。

洋平、ゝ、愛はそこまで考えてはつとした。そういえば洋平のメールを返していない。ルルからのメールを楽しみにしていたあまりに洋平からのメールにがっかりしていたのと、この一週間、洋平は休み時間も勉強していたし、クラスも違うため、すっかり忘れていた。たぶん怒ってるだろうなと思ひながら携帯を開いた。そして、洋平からのメールをもう一度確認した。

『今日は何も言わず先に帰つてごめん。』

初めて見たときは何も思ひなかつたが、冷静になつてみると自分がルルとのメールに夢中になつて洋平をほったらかしにしたから怒つたわけで、洋平が謝る事ではない。そんなこと初めから解つていたのにメールをシカトしてしまつた。今更になつて返事を返すのもどうかと思つたが、とりあえずそうしないと自分の気がおさまらないので歩く速さを少し緩めて洋平へのメールを打ち始めた。むしろメールなんかじゃなく直接会つて謝れつて話だが、今日はルルと会う日であるから、それはまた日を改めて、ゝ、ということ自分で納得した。

『こないだはメールの返事返さなくてごめん。』

とだけ送つた。自分でもこれじゃいくらなんでも、ゝとは思つたが、それ以上言葉が浮かばなかつたからとりあえずそれだけ送ることにしたのだ。今日も予備校のはずだから返事はすぐには返つてこないだろうと思ひ、送信完了を確認するとすぐに携帯を鞆の中にした。だが予想はずれ、洋平からのメールはすぐに返つて来た。すぐにメールを読んだ。

『うん、いいよ。今日はルルつてメル友と会う日でしょ？楽しんで

きなね。でもやっぱメールだけの関係って怖いじゃん。出会い系とかさ、いろんな事件とかあるしさ。気を付けなゆ。』

、、ゆ？ 急いでメールを打ったのか語尾がよくわからないことになっていた。それを見て愛は少し笑ってしまった。

『大丈夫だよ。ずっとメールしてた子だし。心配しないで（>|<）てか今日予備校じゃないの？』

というメールを送ったところで待ち合わせの改札に着いた。丁度五分前だ。改札付近で誰かと待ち合わせているような人はいない。まだルルはいないようだ。メールが来た。今度はルルからだ。少し遅れるというメールだった。了解メールを送り、改札の端っこで壁によっかかった。しばらくして洋平から返事が来た。

『そうなんだけど、熱出して今日は休んだ。ここんどこ疲れてたみたいで、、、っか学校も休んでたし、、、』

それを見て驚いた。一週間も会ってなきやそりや解らないかもしれないが、彼女である自分が彼氏である洋平が熱を出して寝込んだ事さえ知らなかったなんて、、。だんだん自分が情けなくなってきた。

返事をどう返していいのか悩んでいると、もう一回洋平からメールが届いた。

『やっぱり知らなかったんだ。俺が寝込んでる事。ほんととは今日見舞いにでも来て欲しいけどメル友と会うんだもん。来れるわけ無いよな。』

少し突き放すような言い方にどきっとした。何だかんだいってやっぱり怒っているのだろう。今までは愛がどんなに冷めた態度をとっても洋平が我慢して愛の機嫌が直るのを待ってくれていた。だが今は洋平の方から不満をぶつけてきた。それには返す言葉が無く、ただごめん、とだけ送った。

返事はすぐ返ってきた。

『、、、いや、ごめん。別に怒ってるわけじゃないんだ。ただ、最近愛は俺よりメル友って感じだからさ。寂しいんだよ。愛は今どう

かわからないけど、俺は愛のこと好きだよ。」

好きだよ、、　その言葉に目が少し潤んだ。ものすごく久しぶ

りに聞いた言葉だ。そのぶんその言葉の重みも増して聞こえる。

そんなとき、携帯にルルからの電話がかかってきた、、

九条

おかけになった電話は現在使われておりません・・・

何度玲子に電話をしてもこれだ。

この間子供ができたと言われてから姿を見せない。

携帯の番号とアドレスしかお互い知らないから、携帯を変えられていればもう連絡の取りようがない。少年はため息をついた。

玲子は今どうしているのだろう。

彼氏がいると言っていたから、おそらくそっちへ行っているのは確かだ。

しかしお腹の子は俺の子だと言っていた。なのに彼氏の方に行ってしまった・・・

玲子は俺より十歳も年上だけどきれいでかわいくて、まだ十代の様にも見えた。

俺は玲子が好きだ。

好きで好きでたまらない。

だから早く大人になりたかった。

・
玲子が自分を子供扱いしないように、玲子を幸せにできるように・

子供の事もずっと考えてた。

実際玲子に自分の子供ができたなんて聞いてすごく嬉しかったし、産んで欲しいと思った。

でも、その責任をとること、そのサポートをすること、何もできない。

まだ15だ。

就職もできなければバイトもできない。

結婚だってできない。

結局玲子にとって俺はひまつぶしの相手であって、頼れる存在ではなかったのだ。

そう思うと悲しくて涙がでた。

落ち着くために煙草に手をのばす。

だがだんだん苦しくなってきた、床につっぱして嗚咽がでるほどに泣いた。

玲子、玲子・・・自分がそう呼び続けているのにも気づかなかった・

「もしもしルル？」

愛は電話に出ると近くにそれらしい人はいないかとあたりを見渡した。だがそれらしい人はいない。

「もしもし？ 駅着いた？」

返事がない。

「聞こえる？ もしもし。」

「・・・もしもし。」

愛はびっくりして思わず携帯を耳から離れた。

携帯から聞こえてきたのは女の子の声ではなく、男性の声だったからだ。一瞬間違い電話かとも思ったが、送られてきた携帯の番号をそのまま登録したのだからルルから間違いは無いはずである。なのに携帯から聞こえる声は男のものだ。愛は何がなんだかわからず、その場に立ち尽くしていた。

「あの・・・杏ちゃんですか??」

男の声が言った。

杏ちゃんという名前を知っていて、愛の電話番号まで知っている人物と言ったらルルしかない。

「ルルなの??？」

恐る恐る聞いた。

「騙してごめんなさい。ほんとに杏ちゃんとタメの女の子じゃなくて33の男で九条って言います。」

愛はものすごいダメージを受けた。あんなに意気投合できて、何で

も話せる関係のルルが33のおっさんだったなんて・・・タメの女の子と決して疑わなかったのに、というか疑うような事は何も無かったのに・・・

「別に騙して何をしようとか考えてたわけじゃないんだ。ただ、たまたま暇つぶしに女の子としてメル友を探してたら君と知り合って、仲良くなりすぎちゃったから言い出しにくかったんだ。ほんと変なおじさんとかじゃないから安心して。」

「安心してって言われても・・・」

「とりあえず、会って話がしたいと思うんだけど・・・。」

「今・・・どこにいるんですか・・・？」

「すぐ近くにいるよ。君から見て右の方で携帯で話してる人。」

「・・・。」

右を見てみると、愛から10メートル程離れた所に九条は立っていた。九条は、愛が自分に気づいたことを確認すると、電話を切り、愛の方へと近づいてきた。

背が高く、格好も若いためか、三十代のおっさんには見えなかった。その姿を見て少し安心した。見た目おっさんで、いかにも怪しい雰囲気醸し出してるような人だったら速攻帰ろうと思っていた。九条はなかなかの好青年で、優しいような顔立ちをしていた。

「初めまして。」

笑顔で言われたので愛もつられて笑顔で返した。

「杏ちゃんってのは本名？」

「いや、違います・・・。」

「名前なんて言うの？」

「愛です・・・。」

「愛ちゃんか。どっかでお茶でもして話そうか。まだ俺の事信用できてないみたいだし。」

「そりゃそうです。」

「はは、じゃあどこがいいかな？ここら辺全然知らないから愛ちゃんの好きなとこでいいよ。」

本当に信用していいのかわからないが、とりあえず話を聞くことに決めた。

愛と九条

「ほんとに俺の事女の子だと思ってたんだ。」

「そりやそうですよ。だってルルだよ！？普通しくない？？そんな名前。」

いつのまにか九条と普通にしゃべっている愛がいた。不思議な感じだった。

ルルと会うことを楽しみにしていたのにいざ会ってみたらタメの女の子ではなく33の男だった。

だが、今その男とふつうにお茶している。普通の高校生に33の男とお茶する機会なんて滅多にないだろう。

端から見たら援交に見られかねない。なかなか異様な二人組だ。

愛は九条の手元を見た。

「結婚してるの？」

九条の左手の薬指には指輪があつた。

「ああ、これ？結婚はしてないよ。」

九条は笑って言ったが愛にはそれが苦笑に見えた。

「彼女いるのにあたしみたいなと会っていいの？」

「彼女もないけど、、」

今度は明らかな苦笑だった。

彼女がいらないのならその左手の薬指にはめている物は何なのだろうか。ただのファッションか、、

「ちよつといろいろあつてね。」

「ふうん。」

九条の過去にさほど興味はなかったが、一瞬見せた悲しい顔が気になった。

あまり深くつつこんではいけない気がしてそれ以上何も聞かないことにした。

「愛ちゃんこそ、彼氏いないの？」

「いるよ。」

「いいの？こんなおっさんと会ってて。」

愛は少し怪訝な顔をした。

初めはルル、タメで女の子のメル友と会う予定だったのに、それを狂わせたのは九条である。

「だってなんだかんだ言ってお茶してるしさ。いやなら帰った方がいいんだし。」

九条は頼んだコーヒーを一口飲みながら言った。

「確かに、、、」

最初は不安だったけど変なことするような人には見えなかったから。

「

「まあね。俺って年のわりには若く見えるし、かつこいいしね」

「

「え。」

「え。ってなんだよ。え。って。」

二人は笑った。

九条は若い子の扱いがうまいというか、自分自身が若いのか、なかなか話がはずんだ。

いつの間にか彼氏の洋平の話までしていた。

「受験勉強でストレスがたまってるんじゃないかな。」

九条が言った。そしておもむろに胸ポケットから煙草を出した。

「えっ？」

愛はびつくりして九条を見た。

「ん？」

煙草に火をつけた。

「おっさん！」

愛はいそいで九条のくわえていた煙草を取り上げ空いたカップに押しつけて消した。

「ここ禁煙席だよ！」

喫煙席混んでたから禁煙席にしたんじゃない！」

「あ、ゝ、」

九条はしまったという顔をした。

「ごめんごめん。すっかり忘れてた。」

「もゝ。しっかりしてよねゝ。大人なんだからゝ。」

そっぴいながら上着を着始める。

「あれ？出るの？」

「煙草吸いたいでしょ？近くに公園あるから行こうよ。」

「あ、すいません。」

九条も支度を始めた。

「1150円になります。」

愛が財布からお金を出そうとすると、九条はそれを止めた。

「こうゆうときは大人が払うの。」

と言つて九条は上着のポケットから財布を取り出し一万円札をぽんと出した。

愛は目を疑つた。

ちらつと見えたただだが九条の財布の中には札束が入っていた。

少なくとも17、8枚は入っているだろう。

おそらく一般の人で現金で二十万近く持ち歩いている人はなかなかいないだろう。

たまたまお金をおろしたのかもしれないが、ゝ、

「どうも、ありがとうございます。」

札束に驚いてお礼を言うタイミングが遅れたが、九条は愛にこつと微笑んで見せた。

二人は店を出ると、愛の先導ですぐ近くの公園に来た。

丁度お昼時だからかあまり人がいなかった。二人は灰皿のある奥の方のベンチに座つた。

九条は早速煙草に火をつけた。

一口目は吸わずにそのまま吐いた。

二口目でようやく肺に煙草の煙を入れると、深呼吸をしているかのようにゆっくりとけむりを吐き出した。

「ふう、落ち着く。」

「九条さんってヘビースモーカーなの？」

「ん、まあね。ないと落ち着かないね。それに、」

煙草を吸う手を止めた。少し間があったが愛は何も言わず次の言葉を待った。

「愛ちゃんかね、すごく似てるんだ。」

「誰に？」

九条は少し悲しげな顔をして愛の方を見た。

そして左手の薬指にはめている指輪を見せた。

「元カノとか、、？？？」

「そんなところ。」

また煙草を吸い始めた。

風の流れて愛の視界の所々が白い煙で覆われる。

上を見るとさつきと変わらずいい天気で、太陽の陽が木々の隙間から二人を照らす。

だが風は冷たく、愛は少し身震いをした。

「寒い？」

「うん、少し。でも平気。」

「ほんとかよ。手貸してみ？」

と言って愛の手を握った。

「冷たいじゃん。どうかあったかいとこ入ろうか？」

「大丈夫大丈夫。あたし冷え性だから手はいつでも冷たいんだよ。」
「そうかあ。と言ってまた煙草を吸う。握った手はそのままだった。」

九条は何も気にしていないようだ、愛はどうしようかと困っていた。父親と洋平以外の男の人に手を握られるなんて初めてで緊張した。しかも自分の手が冷えているからか余計に温もりが感じられる。愛の鼓動が早くなり大きくなる。九条は自然に手を離れた。ほんの十数秒のことが愛には五分にも十分にも感じられた。顔が赤くなっているかもしれないので愛は俯いたままで言った。

「ね、ねえ。煙草っておいしいの？」

九条は驚いて愛を見た。そして短くなつた煙草を灰皿に押しつけた。
「吸つてみたいの？」

「ま、まあ。」

九条は次の煙草に火をつけて一口吸つた。そしてそれを愛に吸う？と渡そうとした。

「俺は中学んときから吸つてるからなあ。」
笑いながら言つた。

愛は煙草を受け取るとなれない手つきで右手の人差し指と中指の間に挟んだ。

「俺のちよつと重いからおもいつきり吸っちゃだめだよ。」

愛は頷くと煙草に口を近づけた。口をつけた。ほんの少しだけ吸う、
、

「うえっ、げほっつごほっつ」

ほんとにちよつとだけしか吸つてないのに気管が苦しくなつて咳が出た。

「大丈夫かあ？」

九条は危ないので煙草を受け取り、愛の背中をさすつた。

咳がなかなか止まらなかった。

咳のせいで涙も出てくる。よくこんな苦しい物をつまいと言って吸えるものだ。

「お子様に煙草はまだ早いよ。」

九条はからかうように言つた。

いつの間にか九条によつかかっていた。

煙草のにおいがした。

自分がいま吸つた煙草のにおい、。。

実際そうだが大人の男な感じがした。

咳は止まつたが、もっと寄りかかっていたと思いそのままだった。

九条も何も言わずそのまま寄りかかせていた。

不意に九条の手が愛の顔に触れた。

何かと思い九条を見る。目が合うと、心臓が激しく鳴つた。

手はまだ顔に触れたままだ。だんだん九条の顔が近くなっている気がする。

どうしよう、

鼓動が高鳴る。

目を開けていられなくなった。

そして、さっき吸った煙草の香りが再び口の中に広がった、

愛

少年は制服にもかかわらず煙草をふかしていた。

玲子に会えない寂しさからからか煙草が止まらない。

「また煙草なんか吸って、」

少年の母親が言う。何度言っても喫煙を止めない息子に呆れ果てていた。

「うるさいなあ。母さんも吸ってるだろ。」

「お母さんは大人だからいいのよ。あんたまだ中学生でしょうが。背伸びなくなるわよ。」

「大きなお世話」

「てゆうかあんたにこのマンション買ってやったはいいけど女とか連れ込んでんじゃないわよね？」

「はあ？こんな中学生が女連れ込めるわけないじゃん。」

母親のセリフが胸に刺さった。

その連れ込んでいた女は今となってはもういない。過去の女だ。

「そうそう、お父さんが彰彦に会いたがってたわよ。」

灰皿に煙草を押しつけながら言った。

「どうせ会社を継ぐためにどこの高校いけとか大学いけとかいう話するんだろ。」

「そりやそうでしょ。あんたは九条家の跡取りなんですからね。もう高校受験だし、ちゃんと考えなさいよ。」

「はいはい。」

彰彦は呆れたようにまた煙草に火をつけた。

「愛！」

「洋平、、、」

愛は次の時間の体育の授業のためにグラウンドに出ようと昇降口で

靴を履き変えていた。洋平は今学校に来たみたいだった。

「もう具合はいいの？」

「うん。大丈夫。朝ちよつと頭痛がしたから遅刻したけど、」

「そっか、じゃ次体育だから。」

「ん、またな。」

なんとなく二人ともよそよそしかった。

いつものように笑いかけられなかった。

洋平は愛が何を考えているのかわからず悩んでいたし、愛は九条との事が頭をよぎり、洋平に悪いという気持ちと自分がそんな軽い人間なのかという疑問で困惑していた。

なぜあの時九条を拒まなかったのだろう。

拒もうと思えば拒めた。

自分には洋平がいるから、というわけではなく、ふつうに考えて初めて会った人だ。

そういう目的で会ったわけでもない。なのに何故か拒まなかった。

あの後すぐに帰った。

家に着いたとき母親も弟もいなかったのが幸이었다。

顔を真っ赤にして帰ったからだ。

自分の部屋に直行するとベッドに潜って気持ちが落ち着くのを待った。

その後九条からの連絡はない。

あったとしてもどんな風に対応したらいいのかわからなかったから、来なくてよかった。

授業が終わりに教室に戻ると、携帯が鳴った。見ると九条からのメールだった。愛は心臓が飛び出るかと思った。昨日の出来事はどう言うつもりだったのか確かめたかった。

『何してる？俺今休憩中』

普通のメールだった。昨日のことなんか無かったかのようなメール

の内容に戸惑った。九条にとって自分とのキスは何だったのだろうか。ただなんとなく？そんな風には思ってた。欲しくない。そう言えば自分が元力ノと似ているとか何とか言っていた。もしかして、元力ノの代わりにされた・・・？そうだったら許せない。でも聞く勇気が無い。

『あたしも休み時間だよ。もうすぐ授業始まるけど。』
と、無難なメールを返すことにした。

授業が始まると言う事を気にしてか、メールはすぐ返って来なかった。

次は数学だった。いつも数学は授業を聞いていない。今日もそうだった。というか、聞けなかった。九条の事を考えていて・・・。

低めの声で優しい話し方。手を握られたときの温もり。煙草のにおい・・・

実際に吸ったときの煙草のにおいは嫌いだったが、九条の体や服についた煙草のにおいは嫌いじゃなかった。むしろ好きだ。大人の男という感じで、それだけでときどきさせられた。向こうからしたら15歳も歳が下で、何の色気も無いただの子供だ。そんな大人がただなんとなくこんな子供にキスをしようとするわけが無い。何かしらの理由があるはずだ。愛はそう思いこもうとした。

帰り道、今日は洋平と帰る事になった。洋平がわざわざ愛の教室の前で待っていてくれたのだ。予備校の近くまで行くと、いつもは始まる時間まで話したりとかしているのだが、今日は用事があるからとさっさと帰った。今の愛にとって洋平の顔を見るのが一番辛かった。

授業中でさえ他の男の事を考えていたのだ。しかも実際にキスまでしている。洋平はルルと言う女の子と会っていたと思っていたからそんな事考えもしないだろう。ちゃんと昨日の事を全て話し、謝ればいい事なのだがそれをしたくないと思っっている自分がいる。そんな事をしたらもう九条とは会えなくなる。会えなくなるのは嫌だ。でも洋平の事を考えると・・・

いつのまにかルルが自分の大半

を占めていたように、九条もまた気持ちの大半を占めるようになってきた。・・・好きに・・・なってしまった???じゃあ、洋平は???気持ち葛藤する中、人通りの少ない路地に、煙草の自販機があるのが目に付いた。なんとなくそれに近づく。ディスプレイされている煙草を見た。九条が吸っていたのはどれだったか。煙草の種類なんか全然わからない愛はなかなか探し出せないでいた。確か白地に赤だった気がする。

「これか・・・?マルボロ・・・?」

似たようなのが何個もあつてどれが九条が吸っていたものかわからなかった。とりあえず似たものの一番左にあつたのを買ってみた。一緒にライターも買った。買い終わると誰も見ていないか周りを見渡した。制服姿で煙草を買っているところなんか見られたらどうなるか解らない。すぐにその場を離れた。そして、家の近くの公園に行ってみた。小さくてぼろいこの公園は、人通りの少ない道に面しているせいで、この近くに大きくて綺麗な公園が出来てしまったため、利用する人は滅多にいない。今日も誰もいなかった。その公園のベンチに座り、さっき買った煙草とライターを鞆から出した。煙草を開ける。一本取り出し、またなれない手つきで指に挟む。火をつけた。今度はむせない様に本当にちよつとだけ吸い込んだ。また少しのどが苦しくなったが咳が出るほどではなかった。そして今度は昨日と違ってあまりまずく感じなかった。二口目はなんとなく口じゃなく、鼻から煙を吐いてみる。そしたら本当に鼻から煙が出た。こんな鼻から煙が出ているところなんて誰にも見られたくないと思つた。しかし、鼻から吐く方が、煙草の香りがよくわかつた。九条のにおいだった・・・。

父親

「ただいま。」

愛は家に着くとキッチンで夕飯の支度をしている母親に言った。

そのままりビングに向かい、弟がいたのでまたただいまと言つと、テレビの前のソファ―に腰をおろした。

「お帰りなさい。もうすぐご飯よ。」

という母の声にんゝとやる気のない返事をした。

「ねえちゃんなんか煙草くさくない？」

テレビゲームをしていた弟が顔をしかめながら言った。

愛はギクツとして一瞬体を強ばらせた。

「う、うん。友達とお茶してきたんだけど混んで喫煙席しか空いてなかったから、」

苦し紛れながら嘘をついた。

たった一本吸っただけだし、結構長い間公園でぶらぶらしていたのに以外と自分ではおいに気づかないものだ。

「ただいま。」

「あら、お帰りなさい。今日は早いね。」

父親が帰ってきた。

「お帰り。」

愛と弟がハモった。

「ただいま。」

「ご飯できてるけど、お風呂先入る？」

「いや、先飯食うよ。」

仕事で何かあったのか、なんとなく機嫌が悪そうだった。四人は食卓に着いた。

「いただきます。」

「愛、最近彼氏とはどうなんだ？」

いきなり父親に言われ驚いて箸を落としそうになった。

「知ってたの？」

おそろおそろ聞いた。

「なにあんた彼氏いんの。」

母親が口を挟む。

「いや、、まさかほんとにいるとは思わなかった、、」

父親は自分からいったのにしょんぼりとうなだれた。

「そりやいるだろう。ねえちゃんもう高三だよ？」

「そうか、、」

「やだ、お父さん何泣きそうになってんのよ。」

母親が父親の肩をバシツ叩いた。

「愛、どんなやつだ？」

「どんなって言われても、、」

「真面目か？茶髪じゃないだろうな。」

「真面目っちゃあ真面目だよ。ほぼ毎日予備校通ってるし、、」

あまり洋平の話をしたくなかった。

「ごちそうさま、、」

「愛、もういいの？」

「うん、、」

ほとんど残してしまった。

だが、耐えられなかった。そのまま静かに階段を上がり、部屋にこもった。

「ちよっと、お父さんいきなりそれはないでしょ。」

母親が言った。

「だってさあ、俺は心配なんだよ。愛が変な男にひっかかったりしてないか。今日仕事で他の会社の社長にあっただけど、こっちが話してる間ずっと煙草吸ってるし、話聞いてねーし。あんなほんとに金だけの男はだめだって。」

「べつにねえちゃん関係ないじゃん。」

弟が呆れたように言った。

「違うんだよ。なんかその社員が噂してて社長の愛人だかどっか

のキャバクラのお気に入りだかなんだか知らないけど、その女の名前が愛っていうんだって。

それで家の愛は大丈夫かと心配になってしまったんだよ。」

愛はベッドに潜っていた。

携帯が鳴った。

見ると九条からの電話だった。急いで出る。

「もしもし？」

「もしもし、愛ちゃん？ごめんね、急に電話して。」

「ううん、大丈夫。」

「・・・こないだの事だけど。」

いきなりその話であわてた。まだ心の準備ができていない。

「ごめん、急にあんなこととして。びっくりしたよな。」

「な、なんでキスしたの？」

少し声がふるえた。鼓動も激しく鳴る。

「・・・こんなおっさんが何言ってるのかと思うかもしれないけど・

・・・まじっばい・・・」

「・・・はつきり・・・言ってる？」

自分が真っ赤になっているのが分かった。

暑くて布団から出たかったが、家族に声が聞こえるかもしれないので潜りっぱなしでいた。

電話の向こうで深呼吸する音が聞こえた。

「好き・・・だよ。」

胸がいつぱいになり、何も言えなかった。

ときどきが止まらない。

どうしよう。

自分が言わせたのだが、なんて返したらいいのかわからない。どうしよう、どうしよう・・・

「また、会ってくれる？」

先に口を開いたのは九条だった。

「う、うん。」

「よかった。じゃあまだ仕事あるから、また連絡するよ。おやすみ。」

「おやすみなさい……。」

電話を切った。布団からはいでる。

「はあゝっ」

壊れそうな心臓を落ち着かせるために大きく深呼吸をした。顔はまだ赤い。

まさか九条が自分のことを想ってくれていたなんて……。嬉しかった。

まだ一度しか会っていないが中身はルルだ。

ルルとしてメールをしていた時と、話している感じは変わらなかった。現に惹かれていた自分がいる。

少し落ち着いたところで洋平の事を考えた。

ちゃんと言おう。

ルルは実は33の男でその人と会ってしまい、そしてその人を好きになってしまったという事を……

洋平とは別れよう……

悪いと言っ気持ちか、寂しさか、ほんの少し涙が滲んだ……

父親（後書き）

読んでくれてありがとうございます
できたら感想などお聞かせ下さい。次回もぜひ読んでください。

彰彦

こうして部屋にこもって煙草を吸っている時間が増えた。俺ももう高校を卒業する年になった。大学受験も成功し、後は卒業を待つばかりだ。

玲子が俺の前からいなくなってもう三年だ。どうしているのだろうか。

幸せに暮らしているだろうか。

本当だったら俺が幸せにしてやるつもりだったのに・・・しかたがない。

あの時俺はまだ子供だった。

今もだが・・・しかたがないとは思えるようにはなったが玲子への想いは三年前と変わらない。

他の女なんて女じゃない。

今まで何度か告られたり迫られたりしたことはあったが、どれも玲子のちよびつとも魅力を感じなかった。

玲子がいい・・・俺は玲子じゃないとだめなんだ。

そんなことを考えているとインターホンが鳴った。

めんどくさいと思いながらもドアの方へと向かった。

「よっ!」

ドアを開けると高校のクラスの友達の片岡が立っていた。

「どした?」

「どしたじゃねーよ。お前最近メール無視だろ?いくら自由登校だからって引きこもってんじゃねーよ。」

「あ、あゝ・・・。携帯ずっと充電してねえや、。。。」

「おいおい、。。ま、いいや。今日はお前外に連れ出そうと思っ
てきたんだ。」

「え・・・いいよ。そんな気分じゃないし、。。。」

「いいからいいから。」

片岡は勝手に部屋に入ると奥から明彦の上着と煙草を持ってきた。そして明彦の腕をひつつかんで外へと連れ出した。

「たまには外に出ねーとな。」

片岡は俺の親友みたいな奴で、学校にいるときはほぼ一緒にいた。入学当初からの付き合いだ。片岡の人見知りしなくて、何でも前向きに考える所に惹かれた。だが今は、そっとしておいて欲しい。

電車に乗り、横浜で降りた。そして、どこか近くの公園につれて行かれた。すぐ近くにあったベンチに座る。片岡は煙草を取り出した。それにつられて彰彦も煙草を出した。

「てかお前マイセンじゃなかったっけ？あかまるなんか吸ってた？」片岡が言った。

「なんとなく辛目のが吸いたくなっただ。」

「ふーん。」

二人とも煙草に火をつけた。一口・・・新鮮な空気とともに煙もすった。久々に煙草がうまいと感じた瞬間だった。思えば、玲子がいなくなってから、煙草は寂しさや苛立ちを押さえる為の物になっでいて、味わう事をしなかった。それが今日は、久々に外に出たからだろうか、とてもうまい。そのおかげで、憂鬱だった気分が少し楽になった。一本吸い終わる頃には、うつむいてた顔が空を見上げていた・・・。

「なんかあったのか？」

片岡も同じくらいに一本吸い終え、すぐそばにあった灰皿に捨てた。

「なんかあったって言うか、もうずっとだよな、それ。」

彰彦は不思議そうな顔で片岡を見た。

「入学したての頃からずっとこいつはなんか抱えてるなって感じてた。」

「ばればれだったのか・・・。」

「そ、ばればれでした。俺には話せない事か？それならそれで無理して話す事無いけど。」

「いや、そんな事無いけど・・・俺が苦しくて話せないって言うか、

。。。」

もう一本火をつける。

「でもそろそろ話しても平気かも。。。」

というか相手が片岡だからだろう。片岡なら誰にも言わないし、信用できる。なにより、片岡に話せば俺が落ち着く事ができる気がする。。。」

そして、過去にあった玲子との事を全て話した。やはり初めは驚いていたが、最後の方は何も言わず、ただ聞いていてくれた。話している間、何度か泣きそうになってしまったが、そこは耐えた。

「そつかあ・・・お前子供いんのか。」

少し茶化す様に言った。

「ありえないよな。もう二歳だよ。」

「会いたいと思う？」

「どつちに？」

「両方。」

少し悩んだ。

「玲子には今も会いたい。でもやっぱり子供は実際会った事無いからわかんないや。」

「そつか、そうだよな。」

しばらく沈黙が流れた。

彰彦は二人の座っているベンチから少し離れたところにある砂場で二、三歳の子供たちが遊んでいるのを見ていた。そのすぐそばのベンチには遊んでいる子供たちのお母さんらしき人たちが座っておしゃべりしている。その中の一人が他のお母さんたちに手を振っていて帰る所だった。公園の出入り口は一つ。二人が座っているベンチの方だ。そのお母さんは砂場で遊んでいた自分の娘を連れて、こっちに向かって来た。彰彦は何故かその人から目が離せなかった。向こうはこっちに気づいていない。

「玲子・・・？」

ボソツと言ったつもりがだいぶ大きかったらしい。そのお母さんが

こつちを見た。あからさまに驚いた顔をしている。母親になっても昔とちつとも変わってない。玲子だ。と言う事は、この子は・・・「まま？だあれ？」

女の子は玲子の手を小さな手でしっかりと握っていた。

「知らない人よ。さ、帰ろうね。」

「玲子・・・。」

玲子は女の子を連れて逃げる様に帰って行った。

彰彦はまだ信じられないと言うように呆然と立っていた。

「おい、今のが・・・。」

「片岡・・・。」

胸が苦しい。こんな再会の仕方ってないだろう。知らない人って何だ。玲子の手をしっかりと握っていたあの子は俺の子じゃないのか。片岡に全て話したし、もういい加減諦めよう、そう思っていたのに・・・。そして、もしいつか会えても、玲子の幸せを壊すような事だけはししないと決心しようとしていたのに・・・。諦めきれない・・・。たとえもう玲子とやり直す事はできなくとも、忘れる事なんてできない。やしない。

片岡に頭をぽんと叩かれて初めて自分が泣いている事に気づいた。苦しすぎて声も出ない。自分が惨めでしょうがなかった。俺は一生玲子から離れられないんだ・・・。

彰彦（後書き）

だんだん二つの話しが繋がってきます
次回もぜひ読んでください
な。

愛と洋平

九条と会う約束をした。明後日の土曜日、十二時に駅前。今度は車で来るらしい。すぐく楽しみにしている。だが、その前に愛にはしなくてはならない事がある。洋平だ。まだ話していない。話せないでいる。何度か話をしようと試みたがなかなか言い出せない。

「待たせてごめん。」

そう言いながらHRを終えた洋平は、教室から出てきた。

「そうでもないよ。」

二人は歩きだした。

またこの間のような気まずく、微妙な空気が二人の間を流れていく。洋平の通う予備校までは歩いて10分くらいしかない。

その短い時間で別れ話をするのもなんだと思い、今日もまた話すのを諦めようとしていた。

学校を出たところで洋平は言った。

「今日さ、俺予備校休んだから・・・」

「えっ？な、何で？」

「最近俺達微妙じゃね？だから話したいなと思って、、、、」
「こんなところでチャンスが訪れるとは、、、、」

「愛、なんか俺に隠してることない？」

いきなり本題を切り出されて心の準備ができていなかった愛は何も言えないでいた。それが確信となり、洋平は話始めた。

「俺のこともう好きじゃないの？」

「・・・。」

まだ何も言えない。

好きじゃないわけじゃない。

むしろまだ好きだ。

ただ九条のことがある。そして九条のことが好きだ。洋平よりも・
・

「愛？」

洋平は愛の顔をのぞき込んだ。

「どした？」

我慢しているとは思うが、洋平の声が優しくて自分が今から言わなくてはいけない言葉が喉につまる。

「泣くなよ・・・」

言葉の代わりに涙が出てきた。

情けない想いでいっぱいになってしまった。

いけない事とはわかっていながら洋平を裏切った。

その事を謝って、自分とは縁をきってもらおうと決意してこの時を迎えたのにいざその話になるときまずくなって話せなくなる自分が腹立たしい。

「落ち着こう？いつかは話さなきゃいけないことだから。俺ん家行こう。」

と言って泣いている愛を支えて家まで行った。

なぜこんなに優しいのだろうか。

いつもなら洋平の我慢は越えているはずだ。だが今日は違った。

家に着くと、二階の洋平の部屋へ入った。

「ほら、すわんな。」

洋平はベッドに腰を下ろしてその隣を勧めた。

「う、うん。」

洋平の部屋に来たのはこれで二回目だ。初めてのときは付き合い初めてで慣れないせいか、お菓子食べながらテレビ見て、他愛もない話をちよこちよこつとして終わった気がする。

「あんまし泣くなよ。ちゃんと話そう？」

「うん、ごめん。」

愛は手で涙を拭くとハンカチを取り出して更に拭いた。もう涙は止まったようだ。

「も一回聞くけど、俺のこと嫌いになった？」
洋平の顔を見た。

その優しい声からは想像できないほど辛そうな顔をしていた。そんな顔にさせているのは自分だ。

「違う、っ、違うの。」

「何が違うの？」

「・・・嫌いじゃないの。だけどあたしが・・・」

「他に好きな人でもできた？」

「・・・。」

ズバリ言われて言葉を失った。

洋平はそんな愛の手を握った。

「俺やだよ。別れるの。」

洋平を見た。真剣な顔をしている。

「愛に他に好きな人がいたとしても別れないから。」

「な、なんで・・・。」

「なんでじゃないよ。お前が好きだからだろ？てゆうかほんとにいるわけね、その様子じゃ・・・。」

「うん・・・。」

手を握られる力が強まった。少し痛かったが我慢した。

「別れてあげないよ。」

「洋平・・・。」

窓の外はすっかり夕焼けで真っ赤に染まっていた。

その陽の光で二人も赤く染まっているはずだ。部屋の中は気まずい雰囲気漂っている。

「誰？」

「・・・ルル・・・男の人だったの・・・。」

洋平は笑った。

「まじで・・・？・・・やっぱり言うべきかなんというか、っ、握っていた手を離れた。そして愛を見た。今度は少し睨み気味だった。

「お前まじ怖いわ・・・。」

「ごめん・・・。！？」

いきなり洋平に突き飛ばされ、愛はベッドに倒れた。

「なにす・・・」

上に覆い被さり、口の自由を奪われた。両腕もしっかり抑えられている。

「んんっ・・・ はあっ。」

「んで？ そのルルとは何したの？」

「・・・キス・・・ただだよ。」

「俺とは一回もしてないのに？」

そう、九条とのキスが愛にとってファーストキスだった。洋平ともそういう雰囲気になった事はあるが洋平がいつも止めていた。

「俺は愛がそう言う事に関してまじめだと思ってたからキス一つしなかったのに。箱入り娘だし。でもそうじゃなかったんだな。出会って間も無い男とキスできるんだもんな。俺は何の為に我慢してたんだ？」

上から見下ろしている洋平の顔は笑っていたが、目と声は怒りが滲み出ているかのようだった。

いつもの怒り方からは想像できない今の姿に愛はすっかり萎縮して何も言えなかった。

「今家誰もいないから安心してできるよ。」

「！？」

抑えていた愛の腕を放し、愛の顔を撫でる様に触れた。そして今度は軽く、優しいキスをした。

愛は両手が自由になったはずなのに、恐怖で抵抗できないでいる。手はしっかりとベッドのシーツを握り締めているだけだ。

さっきまでの優しい声で話していた洋平はどこへ行ってしまったのだろうか。今の洋平は悔しさと欲望だけで動いている。理性の欠片も無い。

「やだ・・・ やだよ洋平・・・。」

涙が滲む。

「やだじゃないよ。俺のがやだよ。」

首筋や胸元に洋平の舌が這う。同時に制服のボタンもはずされていく。

「洋平……。」

どうしよう……。どうすればいい？

愛の目から一筋の涙がこぼれた。それを見て洋平の手が止まった。

「洋平……。。」

愛は完全に泣き出してしまった。両手で顔を覆う。

怖くて怖くて仕方が無かった。それと、洋平にここまでさせてしまったことに対して申し訳ない気持ちがあいまって苦しかった。

洋平は一人起きあがった。愛を見ると、半ば放心状態で突っ立っていた。

「よ、洋平……。？」

外はいつのまにか暗くなりかけていた。その色は洋平の愛を征服しようとしていた欲望が落ち着きを取り戻した様子を現しているかのようだった。

洋平は両手を硬く握り締めていった。

「別れよう……。愛。」

母親

「どうした？」

九条の呼びかけにはつとして顔を上げた。

今日は約束の土曜日。

二人は九条の乗ってきた車に乗っている。

やはり九条は金持ちなのか、高そうな外車に乗っている。

シートの座り心地がなんとも言えない。

カーステレオからは九条の趣味がジャズっぽい音楽が流れている。

待ちに待っていた九条とのデートの日だが、こないだの洋平のとこ
とがあり素直に喜べない。

最終的には別れる事になったが、あの怒りにも似た洋平の悲しい顔
が脳裏に焼き付いて離れない。その顔を見たとき、この人はこんな
にも自分を愛してくれているんだと思い知らされた。そんな洋平を
裏切る形になってしまって、罪悪感がこみ上げてくる。

人の気持ちほど当てにならない物はない。

だからいけないことをしたとは思っていないが、自分のしたこと
であも相手を変えてしまうことに対して恐怖を感じた。

煙草の臭いがした。

気づくといつの間にか九条が煙草をすっていた。

煙草から出る煙は全開にしてある窓から逃げるように出ていく。

窓は空いているが風が少なく、車内はすぐに煙草の臭いが充満した。

九条のにおい・・・

愛の好きなにおいだ。

「またでかけてんの？愛は。」

愛の母親は、ソファーに横になってテーブルの上にあるもらい物の
クッキーをつまみながら言った。

「うん。最近よく遊び行くよな。デートじゃないの？」

弟もクッキーに手を伸ばしながら言った。

「てか最近姉ちゃんおかしくない？こないだはなんか泣いたみたい
な目で帰ってきたし。」

「うん、まあ年頃ですから。彼となんかあったんじゃないの？」

「そうかなあ。なんか隠してる感じなんだよねえ。最近。」

「ふうん・・・」

思い当たらなくもない。

最近帰ってくるときはいつも思い詰めたような顔をしている。

親の口出すところではないと思い、特に気にしていなかったが弟が
気にするくらいだ、何か相当辛いことがあったのかもしれない。今
日、帰ってきたら少し話を聞いてみよう。母親はそう考えた。

「・・・なんか告げ口みたいでやだけど、姉ちゃん煙草吸ってない
？ここんとこいつも煙草くさいんだよね。彼氏が吸ってるのかも
しれないけど。」

と、気まずそうに言った。

「まさか。」

そんなわけないと軽く流した。

最後の一つのクッキーを食べ、立ち上がった。

そろそろ夕飯の買い物に行く時間だ。

上着を着、キッチンにあるテーブルの上に置いてあった財布を持っ
て外へ出た。

車庫に止まっている車に乗った。

エンジンをかけ、CDを入れた。

ピアノの音が流れる。

それに重なり、ドラムのリズムとサックスのメロディーが入る。
明るい曲感だがゆっくりなテンポで、どこか寂しげな曲だ。

母親はジャズが好きだ。若い頃から聞く音楽はジャズだった。
車を発進させる。

今日はいい天気だ。

それだけで気分がいい。

今日はいつもの近場のスーパーではなく、少し遠いが大きなデパートに買い物に行こう。

そう決めた。音楽のポリュームを上げた。アクセルも少し強めにふんだ。

今日の夕飯は何にしようか考えながら、母親は買い物をしていた。デパート下の買い物物は久しぶりだ。さっき父親からメールが入り、今日は残業で遅くなるから夕飯はいらないということだった。愛も夕飯は外で食べてくるだろう。そう思い、出来合いの総菜屋に目が行った。今日は弟と二人にだけなるからわざわざ作るのも面倒だ。それに、もうすぐ愛の誕生日だ。今日デパートに来たのには愛の誕生日プレゼントの下見というのもある。なので、惣菜をさっさと買ってしまった、冷蔵庫になっっているコインロッカーに入れて、上の階へと上がっていった。

二階は財布やバッグの売り場だった。去年は洋服をあげたから、今年は財布かバッグがいかないと、そのフロアをぐるぐるしていた。ふと、財布に目が行き、その棚の財布を手にとって見ていた。すると、反対側から愛の声がした気がした。耳を澄ませて聞いてみた。やはり愛だ。驚いて一瞬その場で固まってしまったが、誰と一緒にいるのか気になり、その場から少し離れたところから覗くことにした。こそこそ隠れなくてもいいような気もするが、恐らく一緒にいるのは彼氏だろう。親に彼氏といるところを見られるのは愛なら嫌がると思い、直接声をかけようとはしなかった。

遠くから見てみると、相手の男の方は丁度後ろ向きで、顔は全くわからなかったが、格好からして高校生には見えない。どうみても二十後半以上だ。愛は彼氏は受験生と言っていた。だからてっきり愛と同じ年かと思っていたが、今母親の目になっている男は明らかに社会人だ。どういう経緯で知り合ったのか・・・

しばらくすると、二人は今までいた場所の反対側の棚に移動した。

これで男の顔が見える。しかし、向かい合わせになってしまった為、母親は身を隠しながらそっと見ることしか出来ない。そしてやつと男の顔を見ることが出来た。その瞬間母親の顔から血の気が引いた。何故！？どうして！？なんで愛が・・・動かなくなったかと思えば次は急に手足が震え出した。何かの間違いだ。そう思ったかった。頭の中は真っ白になってしまった。

「彰彦・・・」

そう呟いた・・・

九条と愛

誕生日が近いと言う事で、今日はデパートに買い物に行った。最近財布が欲しいなと思っていたので財布を中心に見ていた。

今日は買わなかったが、次、愛の誕生日に会う約束をしたのでその時に九条が買ってくれるらしい。

「そろそろ、時間だね。送ってくよ。」

二人はレストランで食事をしていた。

洋風なインテリアが目立つ、小さなレストランだ。

窓辺には手作りらしい色とりどりのデイベアが飾ってある。明るい雰囲気のお店。

小さいながらお値段ははっていた。

二人あわせて二万三千二百円也。

またもや九条が払ってくれたが、さすがに申し訳ない気がして払うと言ったがだめだと言われた。

見栄を張って言うてるわけでもなさそうだ。やはり九条は金持ちらしい。

「さ、乗って。」

と言いながら車の助手席のドアを開けて愛を促した。

愛はそのレディーファーストにちよっとくすぐったさを覚え、恥ずかしそうに笑った。

「じゃ、行くよ。」

エンジンをかけ、アクセルを踏んだ。

二人を乗せた車はレストランの駐車場を出ると、愛の家へ向かった。その間、二人の会話は尽きなかった。

ばかばかしい話もしたし、真面目な話もした。

洋平の話・・・。

押し倒されたことは愛自身、忘れたことだったので、その事には触れなかったがそれ以外はきちんと九条に話した。

そうしたら九条はただ、ありがとと一言言った。

そして愛の家の近くで車を止め、煙草を一本つけた。

「ちよつと話す時間ある？」

愛の手を握った。

「うん、いいよ。」

ほんとはギリギリだったが、九条ともつと一緒にいたかった。

九条は煙を肺いっぱいにいれると、思い切りはきだした。

「いや、やっぱりだめだ。親に心配かけちゃうからね。」

そついうと握っていた愛の手を放し、煙草を車の灰皿に押しつけて火を消した。

「えつつ……。あたしなら大丈夫だよ？」

急に意見が変わりびつくりして九条を見る。目があった。

「またメールするよ。」

頭をぽんぽんとたたかれた。

子供扱いされたような気がして少しむつとして見せると九条は笑って愛を抱き寄せた。

「ほんとはこのままつれて帰りたいんだよ？」

耳元でささやく声はとても優しく、愛の全てを受け止めてくれるような響きがあった。

それにずっと酔いしれていられたらどんなに幸せだろうか。

優しい声と抱かれている心地よさに愛は身を任せていた。

気づくと九条の顔が目の前にあり、唇が触れ合っていた。

好きだ。私はこの九条と言う男が好きだ。ずっと一緒にいたい。今はつきりと確信した。溢れる想いは止められない。愛は自ら九条の首に腕を回していた。だが、その腕は九条によって解かれてしまった。

「なんで？」

聞くと、今度は軽いキスが返ってきた。

「お子様には手を出せません。」

「子供扱いしないで！もう高校卒業するし。あたしの事好きなんで

しょう?」

「好きだよ。でもそれとこれとはべつ。」

なにがべつなのかよく分からなかったがキツパリ言われてしまったのでそれ以上突っ込まないことにした。

「わかった。今日は帰る。」

おとなしく帰ることにした。

「ん。じゃあ、また今度な。」

愛は車から降り、車が視界から消えるのを見送るとため息をついた。

「確かに子供だけどさっつ。」

ぶつぶつ文句を言いながら家へと入っていった・・・

家族

「お誕生日おめでと〜」

パーンというクラッカーの音と共に、愛のお誕生日パーティーは始まった。

愛の家では家族の誕生日はみんなで大々的に祝うことになっている。今日なんか学校から帰ってくるとすぐリビングに連れて行かれ、パーティーが始まった。

この年で、とも思うがプレゼントももらえるし、ご馳走がでるからそこはありがたい。しかし、ご近所にも聞こえるような声で「ハッピーバースデイトウユー」と歌わすのは勘弁して欲しいところだ。

まあ、今回は愛が主役の為、歌うことはないからいいが・・・

「はい、愛。お母さんからプレゼント。」

「ありがとう。」

開けてみた。

「！」

開けてみると、財布で、九条が誕生日に買ってくれと言っていた物だった。

「どうかした？」

愛ははつとして顔を上げた。

「ううん、何でもない。ありがとう、お母さん。」

次に弟からもプレゼントをもらった。

中身はピンクの花のピアスだった。

父親からはなんとパソコンだった。

愛が学校に行っている間に愛の部屋につないだらしい。

学校から帰ってきて部屋に行く時間もなくパーティーを始めたのはこの為だったのか。「愛ももう大学生になるしな。自分用のパソコンくらいあった方がいいだろう。」

「ありがと。お父さん！」

「いやいや」

その後は家族団らんで楽しい雰囲気ですパーティーは進んだ。

「じゃ、あたし部屋戻るね。」

と言って愛は部屋に行った。

部屋に戻ると机の上にパソコンが乗っていた。

嬉しくて顔がにやけてしまった。

早速起動させてみる。

パソコンが立ち上がると同時にプレゼントの財布の事を思い出した。

早く九条に知らせなくては。

そう思い、携帯で電話をかけた。

だがつながらなかった。

もう一度かけてみたがだめだった。

まだ仕事なのだろうとあきらめ、パソコンからメールを送ることにした。

キーボードにはなれていない為、

『ごめんなさい！九条が買ってくれるって言ってた財布お母さんがあたしのプレゼントにくれてしまったの。あたし用のパソコンから送りました 愛』

というメールを送るのに五分ほどかかってしまった。

その日、九条からの返事はなかった。

次の日、パソコンのメールをチェックすると九条からの返事が来ていた。

『自分用のパソコンあるんだ。じゃあこれからは携帯とパソコン両方で連絡取れるな 財布の件は大丈夫。まだ買ってなかったから。

今度あうときまた一緒に見よう。』

と書かれていた。そして最後に九条のパソコンのアドレスが書いてあった。

携帯のアドレスと共に登録した。これで九条との連絡手段が増えた。嬉しかった。

自分用のパソコンが手に入った嬉しさもあり、家にいるときは必ずパソコンでメールをしていた。

九条はなかなか忙しい人らしく、最近会っていない。と言うか、この間誕生日プレゼントの下見に行った時以来メールしかしていない。一方愛は、自由登校になって、またもや暇な日々を過ごしている。学校の友達はまだ受験戦争に追われているから、愛の暇つぶし相手にはなってくれない。

夕方五時頃。愛はパソコンで九条の携帯にメールを送ろうとしていた。そんな時、愛の携帯がなった。着信音だ。見ると九条からで、愛はすぐに出た。

「もしもし？」

「あ、愛？今暇？」

「う、うん。どうしたの？」

「急に時間が取れたから今から出かけない？まだ誕生日プレゼントもあげてないし。」

「うん！行く」

「じゃあ、今から二十分くらいでそっち行けるから準備して待って。ついたらメールする。」

「わかった。じゃあね。」

電話を切った。よっしゃ！と、心の中でガッツポーズをした。久しぶりに九条と会えるのだ。楽しみでないわけが無い。

早速準備を始めた。

母と九条

今日は夕方から会ったので、門限が九時な愛にはあまり時間が無く、愛の誕生日プレゼントを買って、少しドライブをしたら家に帰らなければならぬ時間になってしまった。今日もまたもつと一緒にいたい気持ちを抑えての帰宅となった。

「ただいま。」

リビングにいる母親に声をかけた。それに気付いた母親は眉間にしわを寄せて言った。

「最近帰り遅いわよ。」

遅いも何も門限が早過ぎるからいけないのだ。そう言おうとしたがやめた。そんな気力は残っていない。九条ともつと一緒にいたくて心が落ち着かないのに親と言い合いになんかなったらどうなるか分からない。

「うん……。」

と気の無い返事をし、愛は自分の部屋へと引きこもった。ベッドになつころがる。そして九条に、『暇になったら電話ちょうだい?』というメールを送った。

いつ来るかいつ来るかと、初めは携帯を気にしながらパソコンをいじっていた。だが、それにも飽きて、ベッドに潜った。布団に入ると急に眠気に襲われ、少しづつ夢の世界へと誘われていた。このまま寝てはだめだ。そう思い、ガバッと起きあがり、背伸びをした。待ってる間にお風呂に入ってしまうことにした。

母親は、愛が風呂場に入るのを確認すると、急いで愛の部屋に行った。お目当ては携帯電話。何故あの時愛が彰彦と一緒にいたのか。そもそも、何故愛は彰彦の事を知っているのか。確かめたかった。携帯は思いのほかすぐ見つかった。ベッドの上にぼんと置かれてい

た。だが、すぐには行動に移せなかった。人の携帯を勝手に見ることは抵抗がある。少しの間迷ってベッドの上の携帯を眺めていると着信音が鳴り始めた。

携帯を取ってみると、なんとかけてきた相手は彰彦だった。でようかどうしようか迷った。

鳴り響く着信音の中、母親は携帯に表示されている九条彰彦の名前をじっとみつめていた・・・

九条は愛を家まで送り届けた後、部下に呼ばれ、また会社に戻っていた。何かトラブルがあったらしい。

やっと今さつき落ち着いたところで、家に帰る支度をしていた。

携帯を見た。

愛からのメールだ。

電話をくれと言うことだが、さすがに疲れたし、しかももうすでに深夜の一時をまわっていた。

もう寝ているだろう。

そう思い、一回は携帯を上着のポケットにしまったが、やはり愛の声が聞きたくなったので、車に乗り、エンジンをかける前に電話をした。

愛はなかなかでなかった。やはりもう寝てしまったかと思い切ろうとした瞬間、

「もしもし・・・。」

でた声は小さかった。

「遅くにごめん。寝てた？」

返事が返ってこない。

「どした？」

「彰彦・・・？」

「うん・・・？珍しいな、いつも九条なのに。」

電話の向こうの愛に違和感を感じた。

声が違うのか？違うわけがない。

小さい声なので聞き取りにくいせいかな？それとも彰彦と名前で呼ばれたせいかな？何か雰囲気が違う気がした。

「彰彦なのね。」

今度ははっきりと聞こえる声だった。

そしてその声を聞いたとたん九条は目を見開いた。

どうゆうことだ。

ありえない・・・そんなことは。

愛の携帯に電話したはずだ。

間違えるはずがない。

なのに何故だ？この声、忘れるわけがない。俺を苦しめたこの声、

九条は息を飲んだ。

「玲・・・子？」

玲子。そう呼ばれ電話の相手が自分の知っている九条彰彦だと確信した。まさか、こんな事って・・・

いろいろと聞きたいことがあった。

何故愛の事を知っているのか、愛とどんな関係であるのか、そして、愛を自分の子だということを知っているのか・・・。

とりあえず落ち着こうとした。愛がいつも風呂から上がるかわからない。

「今から言う番号に電話して。いい？」

玲子は自分の携帯の番号を教えた。

言い終わるとすぐに電話を切って愛の部屋を出た。

そして向かいにある自分の寝室に入る。

すると愛がちょうど階段を上がってくる音がした。

九条は体の力が抜け、ハンドルに頭を乗せていた。

力の入らない手からは今にも携帯が落ちそうになっている。

玲子、あの玲子だった。

でも何故愛の携帯に玲子が出る？しかもこんな夜中に。

愛は家にいるはずだ。ということは家族だろうか・・・

そこまで考えたが、そこから先を想像することが困難だった。

というかしたくなかった。

だが止まらない。

玲子には娘がいる。

18年前生まれた子だ。

そして愛は18歳。その愛の携帯に玲子が出た。玲子の娘は俺の血

を分けた娘だ・・・

愛は・・・

手帳にメモった玲子の携帯番号。その字はふるえていた・・・

玲子と彰彦

煙草が止まらない。

約束の時間まで後五分もない。

九条は一本吸い終わってはもう一本火をつけていた。

すでに30分前にはこの喫茶店についた九条の席の灰皿は吸いがらが五、六本たまっていた。

九条は入り口に背を向けて座っていた。

カランカランというドアが開く音がした。心臓が鳴った。九条は後ろを見れなかった。

いらっしやいませと店員の明るい声がした。

「名様ですか？」

「いえ、待ち合わせなんで……。」

こつこつとヒールが床を踏む音が九条の方へと近づいてきた。

そして九条の横を通り過ぎ、向かい側に座った。

「お待たせしました。」

九条の目の前に現れたのは18の子供がいるとは思えない大人の女性だ。

「玲子……。」

鼓動が早くなる。18年間探しつづけて求めつづけていた女性が今、目の前にいるのだ。信じられない。

九条の頭の中は18年前にタイムスリップしていた。愛の事など記憶の奥隅に追いやり、今は玲子と会えた喜びでいっぱいだった。九条は玲子を見た。

玲子は九条とはうって変わって冷静な表情を浮かべている。それは怒りにも似た顔だ。その玲子の口が開く。

「どういう事なの……？」

その声はとても冷めていて、厳しかった。明らかに九条に敵意を持った言い方だった。

「愛とはどういう関係なの？」

九条は何も言えないでいる。今はそんな話どうだっていいんだ。俺はお前に会えた事が幸せで仕方が無い。そんな話は後にして、今は二人の時間を大切にしたいんだ・・・

そこまで考えてはつとした。どうでも言い話をしに来たわけじゃない。大切な話だ。玲子と俺の娘の話・・・

「付き合って・・・るの？」

言いたくない事を無理矢理口にした感じだった。玲子の目はNOという返事を期待している様だった。

九条は低い声で「ああ」と答えた。さすがに玲子を見る事が出来なかった。

玲子は眩暈がしそうなのを押さえて話を続けようとした。しかし九条が先に言葉を発した。

「もう会わない。」

それを聞いて安心したのか少し玲子の表情が和らいだ。

「今、玲子と会って再確認した。やっぱり俺は玲子が忘れられない。」

玲子は驚いた顔つきになった。玲子と九条は元は恋人でもなんでも無く、言わばセックスフレンドだったのだ。お互い暇なときや寂しいときに体を重ねた。名前と携帯番号しか知らない。どこに住んでいるのか、普段何をしているのか何も知らない。心に空いた小さな穴を見かけだけ埋め合うようなただそれだけの関係だったのだ。玲子にとっては・・・それが九条は違った。九条はこの18年間玲子を想わぬ日は無かった。愛に好意を持ったのも元は玲子に似ていたからだ。

「ずっと、会いたかったんだ・・・玲子に。」

テーブルの上に置かれていた玲子の手に自分の手を重ねた・・・

お風呂から上がると不思議な事が起こっていた。九条から電話があ

つたみたいなのだが電話には出ていないのに出た事になっていた。誰かが着信がうるさかったから勝手に出たのだろうか・・・？とりあえず九条に電話してみたが今度は話中らしかった。何分後かにまた電話をかけたが、まだ話中だったので諦めてその日は寝ることにした。

次の日、起きるとすでに午前十一時をまわっていた。それに驚いた愛は飛び起きてた。

が、今日も特に予定などなかったことに気づくと再び布団を頭から被った。携帯を見た。

九条からの連絡はないようだ。

少し不機嫌な顔になりながら布団から這い出し、着替えを探した。着替えが終わると愛は部屋を出て階段を降りた。

「おはよ〜」

といいながらキッチンに顔を出したが、いつも家にいるはずの母親が今日はいない。

リビングにもいなかった。代わりに弟がいた。

「あれ。あんた学校は？」

ゲームをしていた弟はその呼びかけで初めて愛が家にいることに気づいたらしい。

「姉ちゃんいたんだ。俺今日熱あつて休み〜。」

「はあ？熱あるならちゃんと寝てなさいよ。お母さんに怒られるわよ。」

呆れながら言った。

「いゝのいゝの。お母さん何時に帰るか分からないって言ってたからきつと遅くなるし。」

「どっか行つたの？」

「うん、特に何にも言つてなかったけど。」

そう言つと再びゲームに集中しはじめた。

いつもなら出かけるときは必ず誰とどこに行くかを言つて行く母親にしては珍しいと思った。

が、あまり気にせずになにか食べ物はないかと冷蔵庫を開けた。
特に何もない。

少し寂しい気分になりながら食パンを一枚焼いてイチゴジャムをつけて食べた。

さて、今日は何をしよう。

一日中家でゴロゴロしているのも嫌だ。

だが一人で外に出かけるのもおっくうだ。

それに病人もいることだ。今日は家にいよう。そう思った。

弟とゲームをしていたらいつの間にか午後一時を過ぎていた。

ゲームに熱中しすぎて時間を全く気にしていなかった。

昼ご飯でも作ろうかとキッチンに向かった時、母親の玲子が帰ってきた。

「あ、お母さんお帰り。どこ行ってたの？」

玲子は疲れてぐったりした様子で椅子に腰掛けた。

「ちよつとね、友達と会ってたの。」

「ふうん。ご飯作ろうと思ったんだけどどうする？」

「ああ、ありがとう。でもなんかお母さんちよつと食欲なくて・・・

夕方までねてていいかしら？」

と言って頭痛がするのかこめかみを軽く押さえた。

「うん。別にいいよ。」

「ごめんね。じゃあ休ませてもらうわ。」

玲子は立ち上がると鞆を置きっぱなしにしたまま階段を上がっていった。

愛はちやくちやくと昼ご飯の準備を始めた。

しばらくすると玲子の携帯の音がした。

鞆からあさると登録されていない番号からだった。

切られてしまうといけないのでとりあえず電話に出た。

「もしもし。玲子？」

男性だった。

父親と祖父以外の男の人で、母親のことを玲子と呼んでいる人は初

めてだった。

「あの、すいません。母に代わりますのでちょっと待ってて下さい。」

「そう言うのと急に電話を切られた。愛はびっくりして玲子の携帯を見た。」

間違い電話だろうか。

にしても失礼な奴だ。

間違えたならすいませんの一言くらい言ったらどうだ。

愛は玲子の携帯を鞆に戻した。再び支度を始めようとしたところで手が止まった。

間違い電話なわけないだろう。

向こうははつきりと母の名を言っていた。

玲子なんてよくありがちな名前だがそんな偶然は重ならないだろう。というところやはりさっきの電話は母に用があったのだろう。

しかし、愛が出ただけで切られてしまった。

特に相手が間違い電話だと勘違いしてしまうような言い方はしていないはずだ。なのにどうしてだろうか。

今度は愛の携帯が鳴った。九条からのメールだった。

『昨日は電話できなくてごめん。今日も忙しくて連絡できそうもないんだ。』

そのメールを見て何かひっかかるものがあつた。

「九条・・・？」

いや、そんなことはありえない。あつてほしくない。あつてはならないのだ。

もう一度玲子の携帯を取り出してさっきかかってきた番号を見た。そして自分の携帯で九条の番号を表示した。

「・・・。」

手が震えた。

どうゆうことだ。

もう一度両方を比べてみた。

何度見ても二つの番号は同じだった。

さっきの声は九条だったのだ。でも何故あたしが出たら切ったのだろうか。そして何故九条は母のことを玲子と呼ぶのか・・・

まさか、今日母親が会っていたのは友達なんかではなく、九条ではないのか。

まあ九条が友達ということもあるかもしれないが。

愛は玲子と九条に不信感を募らせていった・・・

別れ

あれから二週間。

この間のメール以来一度も連絡がない。

愛からは何度もメールも電話もしているが九条からの返事は何もなかった。

そして九条との事については玲子に何も聞けないでいる。

あの時以外玲子は何も言わず一人で出かける事はなかったし。

愛に対する態度は何も変わったところはなかったたので、愛も何事もなかったかのように振る舞った。

今日は愛の通う高校の卒業式である。

父も今日は仕事を休んで出席すると言っていた。

高校の卒業式に父親はだいぶ珍しいだろう。

初めは来なくていいと言っていたのだが父親の激しい説得の上、承知してしまったのである。

愛はこの式真つ最中の静けさの中でひたすら九条の事を考えていた。何故連絡をくれないのか。仕事が忙しいと言っていたが本当のところはわからない。

そんなことを考えていたら起立の声にすぐ反応できずにみんなより少し遅れて起立した。

誰か来賓の人の話だった。

礼をして着席した。

何を言っているか全く聞いていなかった。

それよりなによりも九条に会いたいのだ。

初めて会ったとき自然に私の手を包んだあの大きな手、落ち着いた感じの低くて優しい声、本当は私を家に帰したくないと抱きしめた広い胸。

煙草の香り・・・九条の事を思い出せば思い出すほど胸が苦しくなる。

恋人から二週間も連絡がないなんてあり得るだろうか。

愛はあり得ないと思った。

じゃあ今のこの自分の置かれている状態はなんだ？ 恋人ではないのか？ 恋人と思われてないのか？ もう好きじゃないのか？ 飽きられてしまったのか？ そうだったらどうしよう。どうすればいい。わからない。

自問自答を繰り返していた。

答えなど見つかるはずもなかったが、せずにはいられなかった。式が終わり、高校最後のHRは担任のすばらしい話で締めくくられた。今は教室で卒業アルバムにみんなでメッセージを書き合っている。自分のクラスだけでなく他のクラスに行ったり来たりしてみんな思いのアルバムができあがっていく。

愛が女の子たちで固まってメッセージを書き込んでいると、洋平と呼ぶ男子の声が聞こえた。

声のした方を見ると洋平が愛のクラスの男子たちと話をしていた。洋平は愛の視線に気づくと、笑顔で手を振ってきた。愛も笑顔で返す。

あの出来事があった直後はお互い気まずくて目を合わせることもすら出来なかったが、またもや洋平が話をする時間を作り、友達に帰ろうという事になった。まだまだぎこちない感じだがいい方向には向いているはずだ。

携帯が鳴った。九条からの電話だった。急いで電話に出る。

「もしもし！？」

「・・・愛？」

「どうしたの？なんで連絡くれなかったの？」

愛は教室を出た。廊下にも人がいっぱいいてうるさかったので階段の踊り場に移動した。

「・・・今、外に出られるか？」

しばしの沈黙の後、九条は言いくそうに言葉を発した。

「近くにいろの？」

「ああ、校門出てすぐの所にいる。」

それだけ言って電話は切れてしまった。この二週間今まで何の連絡も無かったのに今になって急に連絡をよこしたのはどういう事だろうか。この二週間何があったのだろうか。そして何を考えていたのか。確かめたかった。母との関係、自分との関係……。メールから始まった関係だ。相手の過去の事など知らない事が多くて当然なのだ。九条が今どんな仕事をしていてどんな私生活を送っているのかだ。九条が知らない。一応九条の彼女という関係だが、もしかしたら九条に彼女なんてものは何人もいてその中のひとりである可能性だ。つてある。そんなこと許せないが、でも好きなのだ。九条の事を何にも知らないで好きになってしまった自分がいる。考える前に体はすでに九条の元へと向かっていた。

校門の外に出ると、九条の車がすぐ近くに止まっていた。少し急ぎ足で近づき、助手席のドアを開け、中に入った。

「どうして、連絡くれなかったの？」

座ったと同時に話を切り出した。

九条を見た。だが九条は愛に見られているのに気付いているのかいないのか、フロントガラスの向こうをじっと見つめていた。

「お母さんとはどういう関係なの？」

その質問で九条は口を開いた。

「昔馴染みだよ。この間の電話びっくりしたよ。玲子に電話したら出たのが愛で思わず切っちゃったよ。」

「……そうなの？何か隠してるみたいだけど……。」

「そんな事無いよ。」

愛は母との事に関してそれ以上何も言えなかった。九条の横顔がだんだん悲しい表情になってきたからだ。

「ねえ……。私は九条の何？」

「その事だけど、もう別れよう。」

「えっ……？」

あまりにもすらうと言われたのでびっくりして目が点になる。九条

はまだ前を向いたままだ。

「俺もう三十過ぎだし、そろそろ結婚しないとやばいなくって。遊びもここまできなかって思ってたさ。」

「遊び・・・？」

「そう、遊び。愛もそのつもりだっただろう？こんなおっさん相手に。」

頭がぐるつと回されたような感覚を覚えた。手が震える。足も震える。遊び・・・多少は覚悟していた事だが実際本人を目の前にして言われると恐怖以外の何物でもない。今までの自分の想いが汚されていく・・・。どんなに九条の事を好きか、愛しているか全く伝わっていなかったと言う事だ。今までの自分を全否定されたと同じ事だ・・・。

「それに、俺実社会的に責任ある人だからさ、こんな若い子と一緒ににいるのとかあんまよくないしね。だから、悪いけど・・・さよならってことで。」

そう言つて九条は胸ポケットから煙草を取り出し、一本火をつけた。愛がずっと見ているのにも関わらず、九条は全く見ようとしない。愛は諦めてドアを開けた。もう何を言つてもだめだ。九条は別れると決めているらしい。愛が鳴こうとわめこうと考えを変えるつもりはなさそうだった。

車のドアを閉める音がやけに大きく聞こえた・・・

煙草を吸いながら九条は愛の事を考えていた。嫌いじゃないむしろ好きなんだ。俺の血を分けた娘であるがここまで育ててきたのは俺じゃない。娘だと思おうと思ったって思えるものじゃない。しかも初めは娘だと知らずに出会っているのだ。余計思えるはずが無い。しかし娘である事実は変えられない。そして俺の愛した玲子の娘であるという事実も・・・。なんと言つめくり合わせなのだろうか。俺は玲子を愛していた。しかし、玲子とはずいぶん昔に離別した。

そんな中、愛と出会った。玲子に似ているからか、愛を好きになった。この年になって恋愛など縁が無いと思っていたところに愛は現れたのだ。だから大切にしようと思った。・・・なのに愛が玲子の娘だと分かってしまった。今や愛を異性として見ているのか娘として見ているのか分からない状態だ。・・・もう、一緒にはいられない。

愛はいつか玲子に本当の事を聞くのか、などと考えながら車を走らせた。いつもよりスピードを出した。そうでもしないとこの胸に残っている霽が晴れなかった。

決心

「愛ももう大学生だなあ。」

父親の政夫はお酒も入っているからか、上機嫌で言った。

あの後、家に帰ると愛の帰りを待っていた家族と共に卒業のお祝いにとレストランに食事をしに行く事になっていた。

今は食事も終わり、食後のお茶を飲みながら家族団らんの時間を過ごしている。

「どうしたあ？愛。あんまし元気ないじゃないかあ。」

政夫は愛の顔を覗くように言った。

「大丈夫だよ。卒業式でいっぱい泣いたから疲れたんじゃない？」
あくまで元気なふりをしてみせた。

大丈夫なはずない。

九条にふられてまだ数時間しかたっていないのだ。

楽しい気持ちになんかなれるわけがない。

しかしそれを玲子に悟られるのは嫌だった。

未だに愛には玲子と九条の関係ははっきりしない。靄が晴れない。

玲子を見た。

しかし何も知らないような顔をして話をしている。

何故何も言ってくれないのだろうか。

どう考えても二人に何か関係があることは明らかである。

どうせもう会わないのならば教えてくれてもいいはずだ。

なのにその話になるととても悲しそうな顔をする。

愛はそれ以上何も言えなくなってしまふのだ。

一番初めに浮かんだのが昔に二人はつき合っていたんじゃないかということ。

それならそれではつきり言ってほしい。

たとえそうであっても過去のことだ。何の支障もない。

そう言えば、初めて九条に会った日、九条は私を見て昔の恋人に似

ていると言っていた。

あまり自分が母親と似ているとは思わないが、雰囲気は似ているかもしれない。

「そろそろ帰ろうか。」

と言う政夫の声にはっとして考えを中断した。

その夜、愛は眠れずにいた。

時間を見ると夜中の二時。

忘れられぬ九条を想うあまり涙が出そうになった。

心の靄が晴れるようにはつきりさせてほしかった。

思い切って九条の携帯に電話をかけた。

だが話し中だった。

何コールか待ったが、出る気配がなかったので一つため息をついて電話を切った。

愛は水でも飲もうと部屋を出て階段を降りた。

キッチンの明かりがついていた。

こんな時間に誰かいるのかとゆっくりキッチンに近づいていくと、話し声が聞こえた。

「それで、もう会わないことになったのね。」

携帯で話しているようだった。深刻な話をしている感じた。

「愛には本当に何も言っていないのね？」

「!？」

まさか九条？おそらく電話の相手は九条だ。愛は音を立てないようキッチンに入り口の外側に立った。

「うん、うん。わかってる。愛にこの事は一生話すことはないわ。」

そんなこと話したら家族が壊れかねないもの。あなたも私と愛のこととは忘れて自分の家庭を持った方がいいわ。もう三十過ぎでしょ？」

ここまでの話からやはり玲子は九条の昔の女らしい。

だが、玲子の次の言葉を聞いて愛は耳を疑った。

「もう娘がいることは忘れて。愛はあたしと政夫の子として生まれてから今まで育ててきたんだから。・・・あなたに子供が出来たっ

て言ったときにあなたは何も言ってくれなかったわ……。だけど政夫は結婚しようと言ってくれた。それであたしは愛を一生政夫の子として育てることに決めたの。」

あり得ない……。

九条が私の父親……。？頭が真っ白になった。

何がどうしてこうなった？昔二人が付き合っていたのは確かだった。しかし九条が私の父親でお父さんが本当の父親ではない……

と言うことはお母さんはお父さんをだましてる？お父さんはあんなに私を愛してくれているのに……。

微かに玲子に対して憎しみが生まれた気がした。

今まで並の家より心配症な親なだけの極普通の家庭だと思っていたのに母親だけが知っているわが家の秘密が存在していたなんて……。信じられない。

そして携帯サイトで偶然出会った九条が私の本当の父親だったなんて……。

好きなのに。

愛しているのに。

父親としてではなく男として九条を愛しているのに！愛は苦しくなつて涙が出てきた。

だが今ここで泣いたら玲子に気づかれてしまう。

愛は声を押し殺しながら音を立てないように自分の部屋に戻った……

・布団に潜り、やっと声を出して泣いた。

私のこの体には私が愛している人の血が流れている。九条の血が。もう何も考えたくなかった。

苦しくて苦しくてしょうがない。

時折鳴咽がもれる。

この涙を止めたかったが止めることなどできない。朝まで涙が止まることはなかった。

罪

愛は決めた。

もう一度九条に会って話をしなくては気がすまない。

私の事を本当はどう思っているのか。

嫌いなら嫌いでいい。娘だと思っっているのならそれでもいい。

泣きすぎて腫れた目をこすりながら愛は布団から出た。

電話では九条は出てくれないと思い、メールをすることにした。

自分が九条の娘だと知ったことは伝えないことにした。

ただ本当は好きなのか嫌いなのかをはっきりしてほしかったからだ。理由はなんでもいい。本当の気持ちを知りたい・・・

『あなたの本当の気持ちが聞きたいです。あたしがあなたを諦めなければいけないのであれば連絡を下さい。勝手に貴方の事を思っ
ていていいのであれば私は勝手にさせていただきます。その代わりど
うなっても知りません。』

というメールを送った。・・・というより送りつけた。

こうでもしないと返事をくれなさそうだからだ。

愛は九条からの連絡を待った。すぐ来ない事は覚悟していた。だが二日経つても三日経つても一週間たつても九条から連絡は来なかった。その間愛は九条の事ばかり考えていて食事もまともに取っていない。玲子はそんな愛をいつも心配そうに見ていた。しかし、理由を知っているからか、何も言っでは来ない。その方がありがたかった。九条から連絡が来ない不安と玲子に騙されていた悔しさがいらいらに変わって今にも爆発しそうだったからだ。こんな不安定になっ
ていることに自分でも気付いていなかった。

それから何日経っただろうか。愛が軽く引きこもりがちになってきた頃、九条から連絡がきた。メールだった。愛はボーっとした顔でメールを見た。もう急ぐ気力は無かった。

『連絡遅くなつてごめん。仕事で日本出てたんだ。メール見て驚い

た。もう一回ちゃんと話そう。明日なら昼間空いてる。それでいい？良かったら一時に初めて会ったとき言った公園で。』

一方的なメールだったが、逆にそれで良かった。いろいろ何でとか聞かれたらまた泣くところだった。

その夜もまた明日の事を考え、眠る事が出来なかった。ちゃんと話せるだろうか。ちゃんと本当の気持ちを聞けるだろうか。心配な事が多かった。そしていつのまにか朝日が部屋の窓から差し込んでいた。

まぶしさに目を細める。今日の一時だ。そのときになれば全ての答えを出す。愛はそう心に誓ったのだ。自分がどんなに傷つく結果になろうとも母の気持ちを無視しようとも、九条の本当の気持ちを聞くのだ。

この日愛は珍しくきちんと食事をした。玲子はほっとした様に愛を見ていた。きちんと体調を整えておかなければ話もできない。

約束の一時まで10分を切った。愛は家を出た。玲子は家にいたが、玲子には何も言わずに出てきた。

公園まで歩いて五分だ。今日も初めて九条に会った日と同様、よく晴れた空だ。上を向くと青空が視界いっぱい広がっている。

公園についた。前二人で座ったベンチに九条はいた。また煙草を吸っていた。久しぶりの九条だ。ふられたことも忘れ、後ろから抱き付きたい衝動に駆られたが、それを押さえて九条の隣に座った。以前より幾分か二人の間は隙間があった。

「嫌いじゃないよ。」

そう切り出したのは九条だった。

「嫌いじゃなかったら何なの？」

いつのまにか洋平と同じ事を口にしていた。それに気付いてあのと気の洋平の気持ちは今わかった気がした。嫌いじゃない。その言葉がどれだけ言われた方をいらさせるか。好きなのかそうでないのかはつきりして欲しい。

「好きだ。」

煙草の煙を吐きながら言った。愛は怪訝そうな顔をした。九条の顔を見た。今もまた九条は悲しそうな顔をしている。どう言う事だ？今はつきり好きだといった。

「でも、好きでいてはいけない。」

「何で？」

「何でも。」

「何でよ！」

「もう、気付いてるかもしれないけど、俺は玲子と昔付き合ってた。」

「だから何！？今は関係無いじゃない。あたしは九条が好きで、九条もあたしのこと好きなんでしょう？？」

愛はさすがの様に言った。九条の口からお前は俺の娘だ。・・・なんて聞きたくなかったが、はつきり言ってくれた方がすつきりする。諦めもつく。次に九条から出てくる言葉はそれだと思った。

「俺は今でも玲子を愛してる。」

「え・・・？」

まさかそんな答えが返ってくるとは思わなかった。驚きのあまり九条を見つめることしか出来ない。

「愛を見てても玲子の顔が浮かぶ。だから、愛の事ももちろん好きだけど、玲子じゃなきゃだめなんだ・・・！」

「そんな・・・。」

九条は俯いた。愛の視線に耐えられない様で、顔を両手で覆った。愛はいつのまにか涙が流れていた。そして、九条の膝に両手を置いた。

「代わりでもいい・・・。お母さんの代わりでもいいよ。あたし。だから・・・。」

その後は喉が詰まって言葉にならなかった。だからそばにいさせてそう言いたかったのだ。

涙は止めど無く流れていた。ぐしゃぐしゃで見にくい顔になっていると分かっていたが、九条と目を合わせたくて涙をこぼしながらず

つと九条を見つめていた。

「ねえ・・・代わりでいいからっ・・・。」

泣いている愛の頭をそつと九条はなでた。

「代わりとかそんな風に見れないよ愛を。愛は愛なんだから・・・。」

「だつて・・・やだよ・・・。」

もう親子とかそんなのどうでもよかった。事実一緒に暮らした事も無ければ出会いとは他人だったのだ。今更親子と言う事が分かったつて気持ちを変化させることなんか出来ない。九条を愛しているのだ。九条だつてそうなはずだ。母親の事を愛していようがいまいがあたしのことが好きならそれでいいじゃないか。母親も九条もなんでそんな事を気にするのだ。あたしは九条と一緒にいたいだけなのに。戸籍だつて九条とは赤の他人だ。結婚だつてできる。もう本当の親子とかそんなのどうでもいい。一緒にいたい・・・一緒に・・・。

「愛・・・。」

九条は困った顔をしていた。それを見て愛は決心した。

「ねえ、じゃあ、抱いて・・・九条・・・。」

最後・・・これで最後だ。九条に会うのも九条を想うのも最後にするんだ。涙はもう止まっていた。

これできっぱりと忘れるよう、思いつきり九条を感じればいい。

「愛・・・後悔しない？」

「しない。それだけは言える。」

二人は近くのホテルのベッドに横になつていた。九条の腕を枕に愛は天井を見た。これで九条を忘れられる。明日からは新しい自分になるのだ。

気付くと目の前に九条の顔があつた。唇が近づく。愛は目を閉じた。後は九条に任せればいい。九条の大きな手が頭から首へ、首から肩

へ移動して行く。動くたびビクツと体をこわばらせてしまい、九条は愛を見た。

「大丈夫？もうとまんないよ？」

「大丈夫。」

愛は九条の首に腕を回した。九条も愛の体を両腕で包み込む。

好きな人と抱き合う事がこんなに幸せであるという事を愛は今実感した。九条の温もりが伝わる。気持ちも伝わってくる感じがするのは気のせいだろうか。

体を這う手や唇が、どれも優しくどれも愛しい。今まさに母親の代わりになれているとしても九条が愛しくて堪らなかった。九条はもう一度キスをした。今度は今までした事無いような激しいキスだった。そしてその間に愛の中に九条の指が入っていく・・・

愛は少し痛みを感じ、体を強張らせた。九条を抱く手に力が入る。

何度が抜き差ししていると痛みは快感に変わってきた。もう愛は恥ずかしさと気持ち良さで何も考えていなかった。何もかも初めてで愛の頭はパニックに陥っていた。

「入れるよ？」

その言葉の後激しい痛みが愛を襲った。あまりの痛さに呻き声が出た。呼吸も荒い。もうだめだ。こんな痛み我慢できない。だめだ、だめだ。気を失いそう・・・。目の前には恍惚に顔を歪めた九条の顔。この顔ももう二度と見る事はない。もうこの腕に抱かれる事はないのだ。そう考えると涙が出てきた。九条の汗ばんだ顔が滲む。

荒い呼吸・・・呻き声、揺れる体・・・九条の温もり・・・

忘れたくない・・・

やっぱり、忘れられないよ・・・

九条の動きが止まり、快感の頂点を迎えた・・・

九条の左手が頬に触れた。その左手の薬指には初めて会ったときから付けていた指輪が今ははずされていた。

「指輪・・・」

ボソツと言うと九条は微笑んで言った。

「愛を玲子だとは思えないから今だけはすした。」

また涙が出てくる。

そうか、今はお母さんの代わりじゃなくて、一人の女として抱かれ
たんだ……。そう考えると嬉しかった。

部屋を出るとき、九条は言った。

「もう、諦めはついた？」

「うん約束だもん。もう九条に会わない。」

「ごめんな……。初めてだったんだろ？」

「いいの。じゃ、あんまり遅くならないうちに帰るね！今まであり
がとう。」

そう言つて愛は一人で部屋を出た。

残された九条はふうつと溜息をつくとその場にしゃがみこんでしま
った。自分の犯した罪が今更罪悪感となつて襲つてきた。自分も愛
を愛してしまった。今となつてはむしろ玲子より愛しているかもし
れない……

九条は再び愛する人を失ってしまった……

「ただいま。」

「お帰りなさい。どこ行つてたの？」

家に入ると玲子がいた。愛は玲子を睨んだ。この人がそもそもの原
因なのだ。何故九条と結婚しなかった？何故愛してもいない九条の
子供を産んだ？言つてやりたい事が山ほどあったが今更言つても仕
方が無い事だ。愛はそのまま何も言わず自分の部屋へと向かった。
玲子は何も言えずただ愛が階段を上がつていくのをボーッと見てい
るだけだった。

そしてエプロンのポケットから一つの指輪を出した。若い頃九条か
らもらったおそろいの指輪だ。捨てようと何度も思った。だが、何
故か捨てられなかった。一応大切な愛の父親でもあるし、その事は
忘れてはいけない罪であるからだ……

愛は部屋に入ると電気も付けずにただ突っ立っていた。涙だけが静かに流れ落ちる。

窓を開けた。夕方の冷たい風が愛の顔をなでる。鞆から以前買ったたばことライターを取り出した。一本取り出して火をつけた。部屋中に九条の香りが広がった・・・

貴方と過ごした三ヶ月はとても幸せでした。貴方はとても優しく、愛しくて・・・

貴方しかない、そう思っていました。確かにあたしと貴方は歳が十五も離れていて、貴方に取ったらあたしなんて娘みたいな存在だったかもしれません。それでも、あたしは貴方に抱かれている間は一人の女でした。

急に目の前からあなたがなくなって、あたしは苦しくて苦しくてどうしたらいいのか解らない。涙も止まらない。何故あなたがいなくなったのかは解っているの・・・恋人としてでなくてもいい。もう二度とあたしを抱いてくれなくてもいい。だから、だから戻って来て・・・

お父さん・・・ううん・・・九条・・・

会いたいよ・・・

罪（後書き）

どうも読んでくださりありがとうございました！！
^{がメイン}恋愛物は初めて書いたのでうまく自分の物語が皆さんに伝わっているかわかりませんが、是非、感想お聞かせ下さい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1021a/>

恋

2010年10月9日02時00分発行